

無痛分娩（分娩時鎮痛）

長岡中央総合病院産婦人科

無痛分娩を受けるには「麻酔」が必要です。

1. 無痛分娩

無痛分娩とは麻酔を使用する分娩方法で、「痛みが無くなる」という結果ではなく、その過程をあらわす言葉です。無痛分娩は分娩すべての痛みを取り除くのではなく、最低限の痛みを抑えるものです。麻酔の効き方には個人差があります。主に硬膜外麻酔を使用しますが、麻酔効果が不確実な場合や急を要する場合には、脊髄くも膜下麻酔をおこなうことがあります。

当院における無痛分娩は、麻酔科医のサポートのもと、産科チームで対応しています。背中からの穿刺もトレーニングを受けた産婦人科医が担当します。全身管理や薬剤使用などは、無痛分娩コンサルティング LA Solutions のプロトコールをもとにおこないます。

※ 陣痛が始まってからおこなうのではなく、日付を決めて陣痛誘発する計画分娩で行っています。平日のみの対応になります。

※ 計画分娩よりも前に自然に陣痛がきた場合は、夜間・休日は、無痛分娩はおこないません。

※ 陣痛が始まってからの無痛分娩の新規申込はできません。

2. 麻酔を受ける方に守っていただきたいこと

- 1) 麻酔時には胃の中を空っぽにしておくことが安全上重要です。当日は絶食とさせていただきます、飲水のみ可能となります。
- 2) 過去に経験した、あるいは現在も治療中の病気は必ずお知らせください。とくに麻酔や手術の経験は忘れずに申し出をお願いします。

3. 麻酔の種類について

1) 硬膜外麻酔

硬膜外腔（背中の脊髄に近い空間）に直径 1mm 以下の管を留置します。局所麻酔薬や必要に応じて医療用麻薬を投与します。強力な鎮痛効果を発揮し、産婦さんや胎児への影響が最小限に抑えられる安全な方法です。麻酔開始後、30 分程度で痛みが抑えられてきます。麻酔効果が不十分な場合には、この管を入れ替えることがあります。

2) 脊髄くも膜下麻酔

腰の脊柱の隙間から針を入れて、くも膜下腔に麻酔薬を入れます。硬膜外麻酔よりもやや強い麻酔になります。1回だけの薬剤注入になりますので、長時間鎮痛には向きません。殆どは硬膜外麻酔と併用します。

4. 無痛分娩のメリット・デメリット

1) メリット

陣痛軽減により落ち着いて分娩に臨むことができます。

分娩のダメージが少なく、産後の回復が早くなることが多いです。

2) デメリット

副作用： 足の感覚が鈍くなる、力が入りにくくなる(50%)、血圧低下(10-40%)、かゆみ(10-20%)、体温上昇(15-25%)、産後の創部痛を強く感じる

合併症： 頭痛(0.5-1%)、尿が出にくい(15-20%)、硬膜外血腫(0.01%以下)、原因不明の神経障害(1-2%)

多弁・興奮・耳鳴り・味覚障害（局所麻酔薬中毒）(0.01-0.1%)

呼吸停止、心停止（全脊髄くも膜下麻酔など）(0.01%以下)

麻酔の分娩への影響：

- 1) 陣痛促進剤使用の増加
- 2) 分娩時間の延長（とくに初産の場合）
- 3) 鉗子分娩・吸引分娩の増加（10%）
- 4) 帝王切開率への影響はありません

